

人と櫛の変容——小川未明の『黒い人と赤い櫛』を読む——

小川 敏 栄*

遙か北の方の国にあつた不思議な話であります。

内容を端的に示す一行で始まる『黒い人と赤い櫛』は単なる怪奇譚として読むこともできる。しかし小川未明の童話選集にはたいてい採録されているし、これがいちばん好きだという人もいる。いったいどこにこの作品の魅力はあるのだろうか。

『黒い人と赤い櫛』は『赤い鳥』大正十一年一月号に発表された。童話集『あかいさかな』（大正十三年九月）に収録されている。（テキストには最初の収録単行本を底本とした昭和五十二年ほるぷ出版刊の『日本児童文学大系 第五巻 小川未明集』を使用した。ルビは一部を除き省略した。）

一

ある日のこと、その国の男の人たちが氷の上で、何かして働いていました。冬になると海の上までが一面に氷で張りつめられたのでありました。だからどんなに寒いかといふことも想像されるのです。

小川未明の童話は北の地をよく舞台に選ぶとはいへ、これは（遙か北の方の国）であつて珍しい設定である。視点は働く男たちから遠くに置かれている。（何かして働いてみました。）というのは、生活と風俗が私たちからかけはなれていて、今していることが何なのかよくわからない、それほど地理的に離れた地である、ということをお話しているようでもある。

夜になると地球の北の涯^{はて}でありまして、空までが頭の上に近く迫つて見えて、星の光りまでが、他のところから見るとは、ずつと光りも強く、大きく見えるのでありました。その星の光りが寒い晩には凍つて、青い空の下に、幾筋かの細い銀の棒のやうに、にじんではるのが見られたのです。木立は音を立てて凍割^{ひやわり}れますし海の水はいつの間にか動かなく研ぎ澄した鉄のやうに凍つてしまつたのであります。

冬になると空気が澄んで星の光が輝きを増すのは誰でも知るところだが、この地では、寒い晩には星の光も海の水も凍つて金属と化し、木立は悲鳴をあげて裂ける。極度の冬の寒さがこの変容の力を生み出す。

*おがわ・としえい、埼玉大学教養学部教授、比較文学

そんなに、寒い国でありましたから、みんなは、黒い獣の毛皮を着て、働いてみました。その時、海の上は、曇つて、あちらは灰色にどんよりとしてみました。

表題の「黒い人」は読んだ始めから一体何かなと思わせる。そこにこの文であるから、ははあ、この（みんな）のことなのか、と考えるが、氷の上でカリブーなりアザラシなりの毛皮を着て働く人間をいきなり（黒い人）と言うのは少々乱暴である。まだ私たちの腑に落ちるところまでいかない。

そこに予想もしなかつた悲劇が出来る。

すると、忽ち足元の厚い氷が二つに割れました。こんなことは、めつたにあるものでありません。みんなは、魂消た顔つきをして、足元を見つめてみますと、その割目は、ますます深く、暗く、見る間に口が大きくなりました。

「あれ。」と、沖の方に残されてゐた三人のものは声を上げましたが、もはや及びが付かなかつたのです。

氷が割れた理由はわからない。しかし先の、星の光が銀の棒と化し、凍てついた木立が裂けるという変容のエネルギーは、海の水が鉄のように凍つたはてに裂けるというイメージにつながる。

さらに意外なことに、割れた氷が沖の方へ走りだす。三人は手を挙げて声を限りに叫んで救いを求めるが、人々はただそれを見送るほかない。

あとで、みんなは大騒ぎをしました。氷が突然二つに割れて、しかもそれが、箭やを射るやうに、沖の方へ流れて行つてしまふということは、めつたにあるものでない。こんな不思議なことは、見たことがない。それにしても、あの氷といつしよに流されてどこかへ行つてしまつた三人を、どうしたらいいものだらうと話し合ひました。

冬の海に舟は出されず、どうしようもない、という意見に大方はうなづくが、五人の者が首を振る。

ちやうど、この国には、赤い櫓が五つありました。この櫓は、何かことの起つた時に、犬に曳かせて氷の上を走らせるのでした。

翌朝五人は皆に送られ、櫓に乗つて三人の捜索に出発する。この日も（沖の方を見やると灰色に霞んでゐました）とある。天候と凶事につながりを見る者に、五人の前途は暗くうつつたはずである。はたして、持つていった食糧がなくなる五日目を過ぎても五人は帰つてこなかつた。「誰が、こんどは捜しに行くか。」という声に応ずるものはない。

「これは災難といふものだ。人間業では、どうすることも出来ないことだ。」

かれらは、さう言つて、あきらめてゐたのであります。

このあとに一行スペースがある。ここまでが第一の部分で、長さは全体の七割ほどである。

ませんでした。

第二の部分は、それから幾年もたつてからの奇怪な出来事で始まる。

ある春の日のこと、猟師たちが幾艘かの小舟に乗つて沖へ出てゐました。真青な北海の水色は、ちやうど藍を流したやうに、冷たくて、美しかったのであります。

磯辺には、岩にぶつかつて波が見事に砕けては、水銀の球を飛ばすやうに散つてゐました。

水銀の球の比喻は、よく晴れた日の磯辺に寄せて砕けて輝いて散る波の笑いにふさわしい。冬の氷の〈鉄〉が春の波の〈水銀〉に変わったのである。そこに異変が起きる。

猟師たちは唄をうたひながら、艀を漕いだり網を投げたりしてゐますと、急に、雲が日の面を遮つたやうに、光りを蔭らしました。

〈雲が日の面を遮つたやうに〉というのだから、雲が出たわけではない。雲ではない何かが〈光りを蔭らし〉たのである。「遮る」とは隔てて邪魔をすることである。この動きはかつて水が割れたときのものである。

みんなは不思議に思つて、かほを上げて、空を見上げようとしませんでした。真青な海のおもてに、三つの黒い人間の影が、ぼんやりと浮んでゐるのが見えたのです。その三つの黒い人間の影には足があり

ここで〈黒い人間〉の語が現れる。ようやく表題になつてゐる「黒い人」の登場だと私たちは思う。しかし〈三つの黒い人間の影〉の〈黒い〉は〈影〉にかかつてゐるはずだから、〈黒い人間〉というテキストの切り取り方は間違つてゐる。〈黒い人間〉ではなく、〈黒い人間の影〉が「黒い人」である。

足のあるところは、青い青い海の、うねりうねりの波の上になつてゐて、ただ黒坊主のやうに、三つの影はぼんやりと空間に浮んで見えたのであります。

この文の前半は印象的なフレーズで、それがもちろん〈青い青い〉、〈うねりうねり〉の繰り返しにあることはもちろんだが、足、ある、青い、青い、という「あ」の頭韻、海、うねり、うねりの、上に、という「う」の頭韻、さらに、波、なつて、の「な」の頭韻が実に心地よいリズムとなつて響く。怪異の出現でありながら、おどろおどろしい空気は希薄で、悲しい情景に明るい音楽を流す映画のように、記憶に残る場面である。

〈ただ黒坊主のやうに〉という直喩もいい。さらに、〈三つの影はぼんやりと空間に浮んで見えたのであります〉と言うことによつて、先の〈真青な海のおもてに〉のときより影が見る者の方へと迫つてくるように思える。

晴れた日の青い海面に浮かびあがる黒い影は、亡霊を思わせる。過去のことで良心の呵責があるだけに、不祥、災厄をもたらすかもしれ

ぬものとして意識されるのは自然のいきおいだろう。獵師たちは口に出さぬながら、氷に乗って流された三人の亡霊だと思い、急いで舟を陸へ向ける。

しかし不思議なことに、まだ陸まに向つて幾らも舟を返さないうちに、どの舟もなんの故障もないのに自然に海に呑み込まれるやうに、音もなく沈んでしまった。

「黒い人」は〈影〉であつて、黒坊主と呼ばれるような妖怪としての実体をもたない。海の妖怪ならたとえ国芳の錦絵「東海道五十三対桑名」にあるように巨大な黒タコの姿で舟を沈めにかかるだろう。しかし「黒い人」は海面が透けて見えるような具合に空間に浮かんでいるだけであり、そのあとに舟が沈むこととの直接的な因果関係は示されない。とはいえ人々は、今は海の底にいるかとも思われる三人の者たちがあのとき舟の助けを望んでいたことのあらわれであると思つたらう。水死者が船幽霊になつて舟を沈めるように。

また別の冬の日のこと。

よく晴れた、寒い日のことで、太陽は、赤く地平線に沈みかかつてあました。

すると忽ち、その遠い、寂寥の地平線に當つて、五つの赤い櫓が、同じ程に互に隔てを置いて、行儀よく、しかも速かに、真一文字に地平線のかなたを遮ぎつて行く姿を見ました。

ここでまた「遮る」という言葉が使われている。前は日の光が、

つまり太陽と獵師たちの間が遮られた。今回もかなたの太陽とこちらで見る者たちの間が遮られる。

太陽が赤く地平線に沈みゆくさまは、かつて五つの櫓が三人の救出に出発し、一つの赤い点になつて消えていった場面を思い出させる。おそらく同じあたりを今五つの赤い櫓が意思あるもののごとく走り過ぎる。夕日に染まる地平線を横切る赤い櫓は美しく夢のようだが、あの櫓以外には考えられない。それが今になつて現れ、しかもこちらに戻す気配も見せないのは、不気味としか言いようがないだろう。

この時、それを見た人々は、誰でも声を上げて驚かぬものはなかつたのです。

「あれは、いつか三人を捜索に出た、五人の乗つて行つた赤い櫓ぢやないか。」と、それを見た人人は言つたのです。

「ああ、この国に、なにか悪いことがなければいいが。」と、みんなは言ひました。

人々が恐れたのも無理はない。曳く犬も乗る人もいない赤い櫓が五台連なつて疾走するのを目にするのは、過去の自分たちの過ちに由来するとしか思えない凶事であつたから。

「あの時、あの五人のものを救ひに、誰も行かなかつたぢやないか。」

「そして、あの後、なにもお祭りとしてしなかつたぢやないか。」みんなは、行衛のわからなくなつた、なかまに対して、尽さなかつたことが悪いと、はじめて後悔しました。

「遮る」とは妨げることである。災厄にあつた仲間を助けたいという純粹な心の発露と行動こそ大事であつたのに、これを遮るものがあつた。(なかまに対して、尽さなかつた)というのは、その結果である。第二の部分はここで終わる。

三

第一の部分と第二の部分は対照的である。前者の曇天と後者の晴天。前者の自然の(と思われる)災厄と、その時の出来事に由来する(と思われる)後者の怪異。この怪異は個人のレベルでの怨みや呪いによるものではない。その背後に何か大いなるものの存在が感じられ、人々への警告のため、晴天の中に突然曇天が切り込んでくるというような形で怪異が出現する。その姿をあらためて見てみたい。

春の海の面に浮かぶ「黒い人」は、人の影のように見えながら、それとは違う何かである。海面を見つめる人の背後に別の人が立っていて、その向こうに朝日なり夕日なりがあれば、背後の人の影はこちらの影をのみこんで大きく長く水面にうつる。しかし、それとは異なり、「黒い人」には足がない。

氷に乗って消えた三人の男が「黒い人」に変容したと捉えられるわけである。おそらくかつて氷が割れて流れたのと同じあたりで、人々は春の暖かい日を楽しみながら、軽装で漁をしていた。そこに行方不明のままの黒い毛皮を着た男たちを思わせる「黒い人」があらわれる。黒坊主のようなその影は、おそらくはもう生きていないであろう三人の、あの時救いを求めた必死の思いが凝つたものとも映る。それを見

て、ぞつとして、背を向けて逃げようとした者たちは助からなかつた。

行方不明の三人の男たちを今も追い求めている赤い櫓の方は、五人の捜索者たちの不屈の意志を思わせる。死んだあとも魂魄この世にとどまって、諦めることがないかのようだ。秩序正しい五つの櫓の動き、それは正しき、正義、まっすぐであることの美しさを反映するとともに、悪ではない、大いなるものの意思がそこに働いていることを示す。

「黒い人」と「赤い櫓」の怪異としての特質は、それだけではそれほど恐ろしくないことだろう。「黒い人」は顔も何もわからない影のような姿で、曖昧な、ぼんやりとしたイメージしかもたない。本来の亡霊なら、個人的な怨みによつて現れる幽霊と同じことで、それが誰とわかる形をとつたにちがいない。そうならないのは特定の個人ではなく人々みな責められていることと関係しよう。ただし、ぼんやりした影とはいえ、あの三人であることは「黒い人」を見た猟師たちにはすぐわかつた。黒坊主のような姿が三つあつたからである。

他方、「赤い櫓」は明るく華やかなイメージをもつ。怨念の暗さ、陰湿さとは無縁である。しかし、これが無人・無犬で走る魔的な「赤い櫓」となつて冬の寂しい雪の地平線を疾駆するとき、おぞましい姿の妖怪や怨みをかこつ幽霊によつてもたらされるものとは別の次元の恐怖が生まれる。そして、そこにこの作品の魅力の一つがある。

第二の部分の終わりに、(みんなは、行衛のわからなくなつた、なかまに対して、尽さなかつたことが悪いと、はじめて後悔しました。)とあつた。では、この話は(なかまに対して、尽さなかつたことが悪い)という教訓話なのか。

たしかに誰もがもっている人間のエゴイズム、弱さを問題にしているのだが、それを糾弾するというより、そうした脆さをもつた人間に

寄り添って悲しんでいる、という趣もうかがえるのである。人間の弱さを見つめたあとで、あらためて読む黒い人の現れる風景は、青空が目にしみるようだし、赤い櫓が夕日の中、寂寥の地平線を走る光景は、その背後に大いなるものの存在をうかがわせるような、幻想的な極光の色彩をまとっている。

四

この国に来たひとは、黒い人と赤い櫓のはなしを、不思議な事実として、だれでも聞かされるであります。

『黒い人と赤い櫓』はこの一文で閉じられ、その後は今に至るまで国が平穏であり続けていることが示される。北の国は『赤い蠟燭と人魚』の町のように滅びはしなかった。それは人々が悔いて反省し、お祭りをしたからだけなのか。改心とは、帰らなかった彼らを祀るばかりでなく、〈不思議な話〉(冒頭の文の語)を〈不思議な事実〉(結尾の文の語)として語り伝える行為の中にある。こうした語りの意義の闡明は、これより十年ほど前に世に出た『遠野物語』(明治四十三年)の語りの姿勢を思い起こさせる。『黒い人と赤い櫓』は童話にありがちな昔話、伝説、神話など伝承的説話の形をとっていない。語られているのは、『遠野物語』と同じく、その序にいう〈目前の出来事〉、〈現在の事実〉だからである。

『遠野物語』は〈この書を外国にある人々に呈す〉と添え書きされていた。ここに日本があるという意識である。〈黒い人と赤い櫓のはなし〉は外国から来た旅人に必ず語られるというのであるから、その国

のアイデンティティーの一部になつてに等しい。ひよつとしたら国旗に黒い人と赤い櫓が描かれているかもしれない。

柳田国男は『遠野物語』の序で、類似の伝説が山里に埋もれていることを推測して、〈願はくはこれを語りて平地人を戦慄せしめよ〉と訴えた。未明の仕事を創作の世界でこれに応えたものと見ることはできないか。彼は北の国のしかるべき語りべであつて、その話がときあつて私たちの心を戦慄せしめるのはゆえなきこととしない。